

—スタッフ—

役 職	スタッフ名
中央手術室長兼麻酔科部長	小林 俊司
医 長	足立 匡司
医 長	長尾 典尚
医 長	米本 紀子
医 長	井戸 和己
医 長	木村 幸平
副医長	上原 明子
医 員	森本 正昭
後期研修医	丸山 直子
後期研修医	石井 菜々子
後期研修医	大里 真之輔
後期研修医	石山 諭
後期研修医	鶴野 広大

—概要—

当院麻酔科は、かつては大学医局からの医師派遣を受けていた。しかし、医師不足のあおりを受け、2008年度初めに常勤麻酔科医がゼロとなり、以後公募に切り替え現在に至っている。2008年9月、小林俊司医師が公募による初の常勤麻酔科医として赴任し、以後少しずつ常勤医が増加した。2014年度は常勤医8名、非常勤医2名、後期研修医5名であった。常勤スタッフはベテラン揃いの布陣で、その多くは10～15年以上のキャリアを持っている。常勤医のうち5名は、麻酔科標榜医・日本麻酔科学会専門医もしくは指導医であり、4名が麻酔科標榜医である。

2014年度の年間総麻酔管理件数(アンギオ室含む)は2,615件。その中で全身麻酔は2,412件であった。当麻酔科は原則として、依頼のあった手術麻酔は予定、緊急の全てを受け入れている。また手術室外でも、血管造影室で行う、脳神経外科の脳動脈瘤に対するコイル塞栓術や、口腔外科の動注管設置術などの麻酔を行っている。2013年度には当院手術室において、泉州地域で初の脳死臓器提供も行われ、麻酔科はその全身管理に携わった。

2011年度秋頃より、麻酔科は集中治療室の運営にも協力している。集中治療室の患者管理体制は主治医制のままであるが、日勤・当直帯の医師常駐業務の一部を麻酔科も担うことになった。

研修医、若手医師の教育に重点を置くことや、救急救命士の挿管実習に貢献することは、2008年度からの目標であったが、2014年度には、当院2年目研修医1名、1年目研修医6名、救急救命士の挿管実習生4名、挿管実習

再教育者6名、ビデオ喉頭鏡実習者4名を受け入れることができた。麻酔科では毎週、論文抄読会、および問題症例検討会を開催し、最新の医学情報に接するとともに、各自が勉強を怠らないよう努めている。また後期研修医を中心として、常に臨床研究を行うよう指導するとともに、麻酔の主要学会では、必ず演題を出せるようにしている。

また、麻酔科医は次のような、院内の様々な診療部門、ケアチームに参加している。

＝ペインクリニック＝

ペインクリニックでは麻酔の疼痛管理を応用し、様々な難治性疼痛、慢性痛を治療している。対象疾患としては、帯状疱疹後神経痛、退行性骨関節症が多いが、脳卒中後痛、遷延する術後痛、局所複合性疼痛症候群CRPS、三叉神経痛、四肢血行障害性疼痛(レイノー症候群、ASO)、癌性痛なども含まれている。(米本紀子医長、森本正昭医師、小林俊司部長、古家仁奈良県立医大教授)(近畿大学医学部麻酔科等と連携)

＝災害派遣医療チーム(DMAT)＝

DMATとは「災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた医療チーム」と定義されており、災害派遣医療チーム Disaster Medical Assistance Team の頭文字をとって略してDMAT(ディーマツト)と呼ばれている。医師、看護師、業務調整員(医師・看護師以外の医療職及び事務職員)で構成され、大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期(おおむね48時間以内)に活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた医療チームである。(足立匡司医長、森本正昭医師)

2014年度の当院麻酔科は、基盤をより強固にし、その仕事内容を質的に高めることができたと自負している。また、私たち麻酔科医が非常に働きやすい環境、雰囲気を実現しており、さまざまな医療スタッフや事務の方々、市の関係者の皆さんには、心から感謝したい。2014年度以降は、基本である手術麻酔の質と量を高い水準で維持するとともに、病院の運営方針に従い、必要があれば更に広範囲の分野で、麻酔科の職責を果たしていく所存である。

—実績—

	外科	整形外科	形成外科	脳神経外科	呼吸器外科	心臓血管外科	泌尿器科	産婦人科	眼科	耳鼻咽喉科	口腔外科	腎臓内科	救命診療科	救命初療室	アンギオ脳神経外科	アンギオ口腔外科	合計
予定症例	520	311	153	106	63	120	368	133	16	391	85	2	1	0	17	5	2,291
緊急症例	43	28	4	32	1	28	12	141	2	4	1	0	1	1	25	1	324
計	563	339	157	138	64	148	380	274	18	395	86	2	2	1	42	6	2,615

